



食い入るように説明を聞く親御さんたち（いわき市遠野）

福島で始まるお母さんたちの一歩 ～振津かつみさん医療相談会に参加して～

神戸YWCAは今年の3月、「ひょうごちよつとのぞいてみようツアー」を企画した。その中で振津かつみ医師による「放射能相談会」も行ったが、お母さん方の中から「自分の住む地域の人にも、この話を聞いてもらいたい！」との声が上がリ、7月3日、福島県いわき市遠野町でお母さん自らが企画した「振津さん医療相談会」が実現した。

神戸Y被災者支援プロジェクトメンバー2人（鶴崎、小谷）も当日参加する段取りとなった。海岸沿いを走る常磐線の列車の中から見る静かな海沿いの佇まいは津波の結果であろうか、おおよそ神戸の須磨・明石とは全く違う「寂寥」という言葉がよぎった。いわき着後は車で遠野へ。車窓から眺める一時間あまり、緑の木々、流れる清流に抱かれる自然に、子育てには恵まれている土地だと思った。

地図をみて、福島原発といわきがこんなに近いかと改めて驚かされる。放射能は北西に流れたと

聞いているが、このいわきでも「ドカーン」と爆発した時は放射能が降り注いだはずだ。

宿舎は遠野にある民宿。豊かな自然の中で客が来るのかと案じたら、夕食時、屈強な若者がどやどやと10人あまり。彼らは原発に働きに来ている若者と知る。来春には原発労働者のための宿舎が学校の近くに完成するとのこと。原発から、日々直接に行き帰りをする人や車の放射能の除染、環境の変化が、子どもを持つ親に新たな不安をもたらすであろう。原発の廃炉には何十年とかかる。そこにはどうしても働き人が必要で、その人たちの生活をも考えねばならない。福島の人たちはこのジレンマに絶えず脅かされる。

福島に生活の場を置かざるを得ないご家族は、この夏も一時的な保養キャンプなど避難生活を送る。放射能の不安に対してお母さんたち一人ひとりが知恵を出し、前向きに輪を広げていかれることに、神戸Yも共に歩めればと思った。

（被災者支援プロジェクト：鶴崎祥子）

***医療相談会報告は裏面！**

■振津かつみさん医療相談会 報告

7月3日、振津かつみさん(チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局、内科医)をお招きして放射能医療相談会が開かれた。中心になるのはいわき市のお母さんたち。神戸 Y は振津さんとお母さんをつなげるお手伝いをさせていただいた。当日同席した小谷美智子さんから、相談会の様子を報告していただく。

12名の親御さんたちが集まって

宿舎で早い夕食を済ませた私たちは、新しい出会いに心弾ませ、でも少々緊張しながら会場に到着。畳敷きの広い部屋に12名の方々が待っていてくださった。中に男性が2名。臨月のお母さんもおられた。

振津さんは、プロジェクターで画面展開をしながら話を進められる。まず福島県の地図を開けて説明が始まった。「このあたりを放射能雲が通ったのは、2011年3月15日の午前中の早い時間だっただろう。地図上には放射能の濃度が色分けされているが、いわきは薄い鼠色の地域にあたる。現在は心配したほどの濃度ではないがスポットはあちこちにあるだろう。子どもが遊びに行きそうな草むらなどは計測して立て看板などで注意を。ただちという急性症状はなかったが、将来的にはどうなのか。内部被ばくの場合、大人は3ヶ月で半分体内から出ていくが、子どもは新陳代謝が速いのでもっと早い。これ以上、被曝しないようにすることが大切。野菜は茹でるとお汁に半分ほど移る。今のところセシウムが防御できれば、そんなに心配しなくていい。年に1回は超音波の検診を…」。チェルノブイリの状況なども踏まえ放射能について解説された。

正しく知ることは、安心して生活すること

その後、参加された方からの相談が続く。学校でのプールが再開されることについて、振津さんは「私が教育委員や校長だったら、今年は再開しない。学校の先生と話し合いが持てればいいが…。一週間に一回でもプールの水を計測できないだろうか」。またお正月の行事についても、笹を燃やせば濃縮されるね、と相談者の視線に立って答えら

れる。

話は尽きないが、時計の針は夜の10時に近づく。急いで片付けをし、お開きとする。外に出ると、雨が降り出していた。挨拶を交わし、それぞれの車は発車していった。宿舎では、私たちが夢路をたどる頃、振津先生はまだパソコンに向かっておられた。(小谷美智子)



宿舎の駐車場。多くは原発で働く労働者。



主催者のお母さんたち(中央)と振津先生(右)。この後、お母さんから「放射能への不安や疑問について話し合う場がこの地域では一度もなかったので、大変うれしかった。“他の人にも聞かせたかった”との声もあり、もっと多くの人が振津さんの話を聞ける場を持たらと思う。今回感じたのは、不安を吐き出して安心を得たいとみんなが思っているということ。放射能を正しく知るといことは、安心して生活することにつながるのだと思う」との手紙をいただいた。

★ひと夏のセカンドハウスに5家族がいらっしやいます。

神戸 Y の会員や関係者の方からご提供いただいた住宅に、この夏も福島から5家族(大人7人、子ども6人)がいらっしやいます。楽しく、かつ安心した滞在となるようにお祈りください。

★「放射能副読本」撤回を求める署名にご協力ください!

この副読本は、今年の4月以降、全国の小中高に配布されたものです。「放射線は怖くない」と子どもたちに教えるような内容であると共に、文科省が原子力文化振興財団に委託して作成したもので、多くの問題を包含しています。署名用紙は本館に。読本は文科省 HP からダウンロードできます。